

藝術学関連学会連合 第12回公開シンポジウム

21世紀、いま新たに



装飾 について考える

2015年フローレンス・ビエンナーレ国際コンペティション・テキスタイルアート部門金賞：中川泰通作 TORA ©NAKAGAWA

2017年6月10日(土) 13:00～17:00

デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO) 3階303

入場無料 事前申し込み不要

◆開会 13:00 ◆報告 13:15～14:15 ◆演奏 14:35～15:20 ◆討議 15:40～16:55 ◆閉会 17:00

開会挨拶 磯山 雅 (藝術学関連学会連合会長・日本音楽学会)

趣旨説明+司会 (オーガナイザー) 園 名保紀 (東北芸術文化学会・群馬大学名誉教授)

遠藤 徹 (東洋音楽学会・東京学芸大学)

報告者 川島 洋一 (意匠学会・福井工業大学) 「装飾と透明」

高安 啓介 (美学会・大阪大学大学院) 「無装飾から超装飾へ」

玉蟲 敏子 (美術史学会・武蔵野美術大学) 「かざりと装飾 —— 日本美術からのアプローチ ——」

東西の音楽にみる装飾 解説 磯山 雅 遠藤 徹

演奏 鍵盤楽器：久元 祐子 (ピアニスト、国立音楽大学教授) シタール：小日向 英俊 (シタール奏者、東洋音楽学会)

コメンテーター 藤田 治彦 (意匠学会、美学会、美術史学会・大阪大学名誉教授) 「東洋と西洋の装飾論 —— フランスの関連シンポジウムを通じて ——」

閉会挨拶 山崎 稔恵 (藝術学関連学会連合副会長・服飾美学会・関東学院大学)

主催：藝術学関連学会連合 <http://geiren.org>

(参加学会：意匠学会/国際浮世絵学会/東北芸術文化学会/東洋音楽学会/日本映像学会/日本演劇学会/日本音楽学会/日本デザイン学会/比較舞踊学会/美学会/美術科教育学会/美術史学会/広島芸術学会/服飾美学会/舞踊学会 50音順)

協力：デザイン・クリエイティブセンター神戸

藝術学関連学会連合 事務局 | E-mail : geikanren_office@geiren.org Fax : 045-786-7883

21世紀、いま新たに「装飾」について考える

人類の長い歴史に於て、いでたちを整え、美しく飾り装うことは、常に精神を律する行為であり、愛し信ずるもの、聖なるものと対峙する心の営みとしても重要であった。それ故「装飾」は人間と社会、そして芸術にとり本源的なものであった筈である。例えばヨーロッパ中世やルネッサンスの建築家、彫刻家、画家はしばしば偉大な工芸家であり、又装飾に通じていた。長い時間をかけ、細部に至るまでその完成度を高めた作品で、人々の精神をなごます一定の装飾性が追求された。そもそも「装飾」とは、通常考えられているように決して辺境的で、第二義的なものとしてのみでなく、実はあらゆるジャンルの芸術に、互いを飛び越え変幻自在に付随し、又全体を活気づける核としての力をも発揮し得るものであろう。だからオペラのような総合芸術、祝祭の如き人々の集いの場の効果推進にも力を発揮するであろう。作品の外表を飾るだけでなく、芸術の奥深くまで浸透し、その装飾様式が時代や社会の空気全体をも支配したロココやアール・ヌーヴォーのようなケースがいま想起される。だから今日、社会で一旦その存在感を失っている「装飾」ではあるが、諸芸術、諸社会活動、そしてメディアや新技術との交流のもと、今後場合によって「装飾」をキーワードに芸術、ひいては人間社会全体が活気づけられて行くことは考えられないであろうか。

本来、芸術に身近で重要な問題である筈の「装飾」を、いま改めて芸術研究に携わる各学会が問い直し、「装飾の過去と現状」を見つめつつ、社会における「装飾の今後」、可能性について語り合うのは意義あることと思われる。

川島 洋一 (意匠学会・福井工業大学) 「装飾と透明」

1998年に発売されたiMacでは、中身を見せる理由のないコンピュータに透明の表現が用いられ、現代デザインにおける装飾の意味を象徴する出来事となった。本来は中身を隠すはずの若い女性のバッグが透明になり、プロダクトやパッケージにも透明な表現が増えたのは、情報化時代の人間が求める感覚と関係がある。コーリン・ロウが指摘した透明性は、より複雑化して、現代建築における先端的なデザイン手法の一つとなった。国際的に活躍する建築家の事例を通して透明性の表現手法を検証し、現代建築における装飾性の意味を考えてみたい。

高安 啓介 (美学会・大阪大学大学院) 「無装飾から超装飾へ」

本発表はまず近代デザインの装飾否定のむしろ不徹底さを指摘する。そしてそれをふまえて、現代のデザインの傾向をこころみに超装飾の語のもとで把握しようとする。超装飾とは一つの理念というよりも、ものの本体とその付加物としての装飾との区別がつきにくくなっている状態をいう。私たちが19世紀よりも複雑な状況におかれていることを確認したうえで、現代のデザインにおける装飾のゆくえを探りたい。

玉蟲 敏子 (美術史学会・武蔵野美術大学)

「かざりと装飾——日本美術からのアプローチ——」

「装飾」は、日本の造形藝術が西欧世界に姿を表わした19世紀半ば以来、その特性を表わす言葉となった。このことを内側の文脈から見直すと、日本においては「かざり」、すなわち装飾的であることは、けっして西欧や中国がそうであるように精神性や聖性と対立するものではなく、それらを含めた造形藝術全体を包み、支える基盤のような存在であったことに気づく。発表では、具体的な作品や事象を紹介しながら、その背景にある生活、そしてそれを創り出す人間交流へと視野を広げ、装飾が人間の生きることに深く結びついた普遍的課題であることを主張していくことにしたい。

東西の音楽にみる装飾

解説： 磯山 雅 (藝術学関連学会連合会長・日本音楽学会)

遠藤 徹 (東洋音楽学会・東京学芸大学)

演奏： 鍵盤楽器 久元 祐子 (ピアニスト、国立音楽大学教授)

シタール 小日向 英俊 (シタール奏者、東洋音楽学会)

藤田 治彦 (意匠学会・美学会・美術史学会・大阪大学名誉教授)

「東洋と西洋の装飾論

——フランスの関連シンポジウムを通じて——」

今回のシンポジウムでは「装飾と透明」「無装飾から超装飾へ」「かざりと装飾—日本美術からのアプローチ」という興味深い報告がデザイン、美学、美術史のパネリストの方々により行われ、異なる専門、そして東西を超えたディスカッションが期待される。藝関連の準備を十分生かすには、装飾がテーマでありながら非装飾論議にならぬよう、装飾について積極的に考えることであろう。今年の2月にフランスでも装飾の国際コロックが行われており、いま装飾は西洋でも注目されているテーマである。3つの発表と、造形芸術を超えての装飾論参加を誘う東西の音楽演奏による事例の提示のあと、同コロックの概要をスライドで紹介し、西洋での装飾論議との比較をまじえながら、コメントーターとして発言させていただく。

日時

2017年6月10日(土)

13:00~17:00

入場無料 事前申し込み不要

会場

デザイン・クリエイティブ
センター神戸 (KIITO) 3階303

〒651-0082 兵庫県神戸市中央区小野浜町 1-4

主催：藝術学関連学会連合 <http://geiren.org>

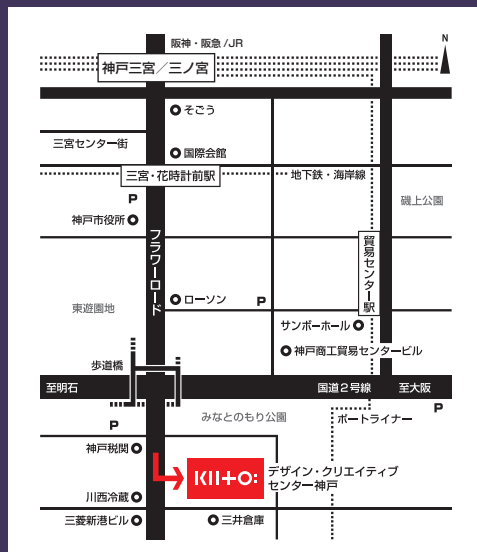
(参加学会：意匠学会／国際浮世絵学会／東北芸術文化学会／東洋音楽学会／日本映像学会／日本演劇学会／日本音楽学会／日本デザイン学会／比較舞踊学会／美学会／美術科教育学会／美術史学会／広島芸術学会／服飾美学会／舞踊学会 50音順)

協力：デザイン・クリエイティブセンター神戸

◇お問い合わせ

藝術学関連学会連合 事務局

E-mail: geikanren_office@geiren.org Fax: 045-786-7883



ACCESS

- ・阪神神戸三宮駅、阪急神戸三宮駅、JR三宮駅よりフラワーロードを南へ徒歩20分
 - ・国道2号線を越えた神戸税関東向かい
 - ・神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
 - ・ポータルライナー貿易センター駅より徒歩10分
- ※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。